
猫と月

< -

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と月

【コード】

N04320

【作者名】

くー

【あらすじ】

仕事を終え、帰ろうとしたら真っ黒な子猫を拾った。

飼い主を探す短い期間の、些細なやり取りはほんのりと心を温かくしてくれた？

朔月

仕事を終えた頃には日がとっぴり暮れていた。

会社脇にある薄暗い駐輪場に止めた自転車の前かごに資料が入った鞆を放り込んだら

「ぶぎゃっ!!」

と鳴いた。

鞆が鳴くわけもなく慌てて鞆を除け、心許ない明かりで辛うじて視認出来たのは、黒い子猫だった。ただ赤ん坊くさくないので、成猫になるちよつと手前といったところか。突然鞆をぶつけられ不機嫌そうに見上げてくる猫に、そつと手を差し出したらくんくと濡れた鼻先で嗅がれた。暫く様子を見た後、とりあえず敵意はないと分かってもらえただろうと、鞆を腕に掛け、こいつの脇に手を差し込んで持ち上げる。猫は二度三度身を擦るが大した力もないので、気にせず駐輪場唯一の蛍光灯にかざしてまじまじと見た。野良なのか首輪の跡もない。腹も尻尾も腫も真つ黒の黒ずくめ。艶やかな毛が乏しい明かりを反射し、模様を描く。

どことなく不遜な面とにらめっこをした後、確認すべき事を思い出した。

「オスカ」

メスよりオスのほうが貰われやすいと、小耳に挟んだ覚えがある。ならば明日にでも獣医に持ち込んだら引き取ってもらえないだろうか。

そのまま放置するには気が引ける小さめな猫をかごに戻し、自分の鞆はハンドルに掛ける。

とりあえず、今晚必要な餌を晩御飯と一緒に買おう。自宅近くのコンビニにペットフードがあったはずだ。

見上げた月のない夜空より黒い猫は、そのまま闇に紛れかごから消えそつだ。

「お前の名前、今晚だけ『朔』だから」

一晩だけだが、呼び名がないのは不都合がある気がして、仮の名をつける。

いつもより一匹分の質量が増えた自転車のペダルの重さは、いつもと変わらない。

二日月

定時に仕事を終え、まっすぐ帰りトイレのドアを開けると、床に朔が寝そべって顔だけこちらに向けてきた。音や臭いでばれてはまずいとトイレに缶詰にしたのだが、少し考えれば退屈だったろう事も、換気扇を付けていても暑かった事も分かりきった事だ。だらりと伸び切って毛皮のラグのような有様に、申し訳ないと思いつつ、つい苦笑がもれた。

「飼い主を探しにいくよ」

仕事の鞆を部屋の入り口に置き、財布だけポケットに入れてから、片手を腹の下に差し込み掬い上げる。

ペット禁止のワンルームマンションの廊下に人気ひたけがないのを良いのに、堂々と朔を抱えて駐輪場に出る。誰かに見咎められたら迷い込んでいたので適当なところに逃がしてくると言えはいいだけだが、幸いな事に誰にも会わなかった。

昨日と同じように前かごに入れた朔がくるりと丸くなるのを確認し、動き出す。日が沈みつつある街中を自転車で20分かけて進むと、ペットホテルを兼ねた動物病院が見えてきた。

昨日調べたところによると、ホテルと病院の受付時間が20時までとのことなので、時間に余裕がある。多少粘れば何とかなるだろうと意気揚々と動物病院に入り……すっかり夜になった頃、ビニール袋一杯のペットフードの試供品を片手に、もう片手には朔を抱えて動物病院を出た。

獣医が慈善事業ではない事は分かる。たまに私財を投げ打って保護活動をする人もいるが、ここの獣医兼オーナーはそこまではいかななもの、悪い人でもなかった。引き取り手を捜そうとデジカメで写真を撮り即席のポスター（こちらが一人暮らしだと知った獣医が、病院を連絡先にくれた）を作って待合室に張ってくれたし、朔を一通り診察し、健康であると太鼓判を押してくれたのだから、む

しろ良い人の部類だと思う。ただ、無料で預かる事は出来ないと言いなから申し訳なさそうに差し出されたペットホテルの料金表に、絶句した。

「一度受けると際限ないから、どこかでラインを引かないとこっちもやってけないんで」

「割引でどう？と言われたが、いつまでも目途がつかないものに際限なくお金を使えるほど懐事情が良いとは言えない。」

「そのまま放り出すのもなあ」

「すぐごと病院を出て、自転車の前かごにビニール袋を入れ、隙間を作り朔を下ろす。朔は自分の場所を整えるために暫く身じろぎした後、黒い塊と化した。」

果たしてこいつの飼い主は見つかるのだろうか？

この凶太さからして、光明は二日月より薄そうだ。

なんとなく、そう思った。

三日月

餌付けとは三日で出来るもののようなのだ。

仕事を終え玄関を開けると、三和土たたきで例のラゲのように長々と寝そべっていた朔が跳ね起き「なー」とも「みゃー」ともつかない声を上げた。

「ここ、ペット禁止だから、静かにして」

苦言を呈するが、朔は首を傾げるばかり。そりゃそうだ、人語を完全に解する猫なんていないし、空気を察するにも同居三日の間柄には無理な話だ。

声帯を手術して声を抑えるという荒業もあるらしいが、気持ち的にも金銭的にも無理だ。

鞆を定位置に置き、ペットフードを小鉢に盛って玄関に取って返す。この時点で朔は脛に擦り寄りのどを鳴らします。フローリングを汚すと後が面倒なので、三和土が朔の食事スペースだ。ちなみに朔のトイレは、人間用のトイレの横に100均のトレーにトイレに流せるトイレ砂を入れた物だ。昨日一日トイレに缶詰になっていた成果か、トイレ以外で粗相をしている様子がないのを見て取り、ほっとする。

昨日の事を反省してトイレから玄関までを開放し、奥へ入れないよう引越しの時に使った段ボール箱で作った柵は有効なようだが、ダンボールに引っかけた跡がある。獣医がつめを切ったので大した被害はないのが、対策を考えないとまずそうだ。

一心不乱に食事を続ける朔を横目にジャケットをパイプハンガーに掛けてから、シャワーを浴びてバスルームから出たところで、満腹になった朔と目が合った。

部屋に上げるなら、洗ったほうがいいか。

下着姿のまま朔に手を伸ばすと、何かを察知したかのように逃げられた。

「食事の恩を忘れるな」

こちらの文句は理解されないが、場所が狭いので捕まえるのはあつという間だ。

……………。

*

「気持ちいい」

自分も濡れ鼠になったので着替えなおしてからベッドの上に胡坐をかき、朔を膝に乗せ撫でる。

洗うだけで朔の手触りがこんなに変わるとは思いも寄らなかった。

光沢のある黒毛は更に深みを増し、さらさらといつまでも触りた
い。

だが、これは朔の飼い主が見つかるまでの仮の生活だ。

ここに馴染む前に見つかってほしいものだ。

そんな思いを知る由もない朔が、くわあ〜とあくびをした。むき出しになった細い牙が、

まるで三日月のように部屋の明かりを反射した。

十三夜

件の動物病院に行くと、獣医が笑顔で迎えてくれた。

「気になるから直接見てみたいという話がありますよ」

既に2匹飼ってるうちの常連さんですが、どうです？と訊かれ、咄嗟に返事に詰まった。

「連絡とかはどうすればいいんでしょう？」

「直接連絡を取り合うのも手ですが、これもご縁なのでうちの待合室で対面するのはどうでしょうか？」

「では、その方法で。仕事がある日は夜にならないと時間が空かないので……」

「うちのご近所さんですし、ご主人も仕事をしている方なので、夜でもいいと思いますよ。今日くらいの時間で、都合の悪い日はありますか？」

「あ、特には……」

「では、明日はうちが定休日なので、明後日当たりに相手方に連絡しますね」

「お願いします」

うちに朔が来て10日とちょっと。

早いのか遅いのか。

満月に近い弓張り月は、きりりと弦を絞りじき弓が放たれる緊張感を持っている。それは朔を手放すまであと僅かだと、暗喩しているようだ。

それは予定通りの出来事。

獣医に寄った分、帰りが遅れているので、早く家に帰り、朔に餌をあげなくては。

自転車を漕ぐ足に力を込め、家路を急いだ。

満月

「はい、では明日伺います」

携帯の通話を切り、自宅に帰る。

「お前の飼い主になってくれる人が見つかりそうだよ」

出迎えてくれた朔の首の下を指で撥ると、ごろごろと喉を鳴らし、目を細めた。

携帯のバッテリー残量が少ないので、カラーボックスの上にある充電器に繋げる。

一方、朔は珍しげに窓の外を見上げていた。

「満月が珍しい？」

帰宅の道中、まん丸な月が昇りかけていたのを思い出し、朔を抱き上げベランダに出ると、涼しい風が吹いている。コンクリートで囲まれたベランダなので、危なくないだろうと朔を下ろす。暫くきよろきよろと辺りを見回し動かないので、冷蔵庫からビールを持ってくると、朔は既に探索を始めていたところか、どうジャンプをしたのか手すりに立っていた。

「朔?!」

その時、慌てた理由はなんだったのだろうか。

朔が落ちるとでも思ったのか、それとも逃げるとでも?

急に掛けられた声に怪訝そうに首を傾げた朔だったが、危なげない足取りでくるりと向きを変えた。

月を眺めてる?

狼男なら変身するところだが、猫の場合はどうなんだろうか?

人間になるなら中学生?それとも小学生か?

変身するなら猫又ってところだが、猫又になるには年をとらなくてはいけないはずだ。どうみても大人にもなっていない猫にそれは無理だろう。

意味もなく真剣に頭を悩ましていると

……猫又自体空想でしょ。
嘲笑うかのように朔の尻尾が左右に揺れた。

十六夜

「今日も早いね」

5時30分ちょうどにタイムカードをスリットすると、後ろから声を掛けられた。

「ん、ちよつと」

朔を飼い主候補と引き合わせるために獣医と約束した時間まで余裕はあるものの、慌てるとろくな事がないので定時に出るだけの事だが、何となく説明が面倒で適当に言葉を濁してその場を後にすると、「恋人かな？」などと話している声が漏れ聞こえてきた。

猫だ！猫！

内心講義しつつも戻って訂正するのもおかしいので、後日昼食の雑談の時にでもさり気なく話題にしようと心に決め、駐輪場に向かう。

期間にして約二週間。長かったような短かったような朔との生活は、悪くはなかった。子猫はもつとうるさく鳴いて手が掛るイメージがあつたのだが、朔はすぐにトイレを覚え、食べ残しもほとんどなく、それ程鳴かない。気まぐれに傍によつてきたり膝に乗ることはあつたがこびる様子もなく実に生活に溶け込んでいた。

「……………」

踵を返し会社のロビー端にある人気のない階段まで行き、携帯を出すと件の動物病院の番号にかける。すると5コールを待たず獣医が出た。いつも6時以降の様子しか知らないが、定時で上がってしまうのか、人手不足なのか、獣医以外の従業員を見た覚えがない。

「あの、猫の里親の……………」

「ああ、こんにちは。どうされました？」

「どうしても今日やらなければいけない残業の終わる目途がつかないんで、申し訳ないのですが顔合わせは明日でもよろしいでしょうか？」

「分かりました、相手の方に伝えておきます。本当にご近所なので夜ならいつでもいいそうですよ」

微妙に含み笑いをこらえているように聞こえるのは、こちらの急な思い付きに後ろめたさがあるからだろう。

携帯をポケットに戻し、今度こそ自転車で家路に着く。途中コンビニに寄って自分と朔の晩御飯を買う。それもいつもよりワンランク上のものを奮発しよう。ささやかなお別れ会だ。

いつものようにドアを開けると、三和土に寝そべり涼をとる朔がむくりと起きた。

朔に手を伸ばすと、撫でてくれとばかりに首を伸ばしてきたので、今日でお別れかもしれないからと請われるままに首を掻くと擦り寄ってきた。ついでに背中もカリカリ掻く。気持ちよさそうに喉を鳴らすので最後だからと長めに掻いた。

ペット禁止の住居で一人暮らしをしているのだから、きちんと世話が出る飼い主を探す以外他に手はない。

「シャワー浴びたら、ごはんにしよう」

十六夜月は躊躇い月。

日没まであと僅か。

未だ昇らぬ月はゆっくりと顔を出し、最後の晚餐を照らすだろう。

立待月（十七夜）

「朔、行くよ」

定時間際に一仕事頼まれてしまい、自宅に着いた時には着替える間もなかった。仕事の鞆を放り、空いた手で小さな身体を掬い上げる。すぐに家を飛び出した。

片手で朔を抱えながら元来た自転車置き場へ戻って前かごに朔を降ろし、くるりと丸まったのを見て取るや、全速力で自転車を飛ばす。

約束の時間に間に合うか？

不要になるからと譲るつもりで準備していたトイレ砂やキャットフードの試供品を忘れたが、今更撮りに戻る余裕はない。とにかく自転車を漕いで漕いで、汗が滲む頃、遅刻するどころか数分の猶予を持って動物病院前に着いた。

「ふうー」

自転車のスタンドを立て、日没したものの未だ明るさが残る空を見上げながら、近くの自販機で買った炭酸飲料を飲んで一息ついてから前かごの中を覗くと、朔がギュツと顔を隠すように丸まって小さな塊になっていた。

アスファルトで舗装された道路に大きな起伏はないが結構なスピードを出していたので、小さな体にはきつかったかもしれない。

「朔ものだ渴いた？」

ちよんと指で額を突つくと、朔が恐る恐る顔を上げた。

その姿に思わず苦笑を洩らしながらペットボトルを差し出すと、暫く様子をうかがった後、結露を美味しそうに舐めだした。ボトルのキャップを閉めてかごの中に置き、自転車を漕いでいる間に乱れた身だしなみを整える余裕も出来た。そうしている間に朔が露を舐めるのを止めたので、もう一度ペットボトルを傾け飲み干そうと顎を上げると、

「ん？」

さっきまで何もなかった空の隅っこに月が姿を現していた。
ほんの少し欠けた月だ。

*

話はトントン拍子に進んでしまった。

空の前かごの自転車に乗る。

行きは朔と、帰りは月と。

「……」

これでいいと自分に言い聞かせ、帰路に就いた。

二十三夜待ち

玄関脇にあるビニール袋の中身を分別しなくては。

ペット用品なんて立派なものではなく、100均やホームセンターで買った代用品ばかりだから、ごみに出したところでアパートの管理人も住人も不審に思わないだろう。

あれから1週間弱。他所の部署で出した不具合のとばっちりで残業続きとなり、片付けたいのに全くの手付かず。さすがに夜半過ぎになった今日は、車の通りもほとんどおないどない。帰ったらシャワーを浴びてビールを……そういえばビールが1本もないと、気付いた。

通り過ぎたコンビニへとUターンし、中に入ると店内の明るさに一瞬目がくらむ。

買い物かごにビールとチュウハイを数本ずつ入れ、あっさり系の弁当を　　と思っただが油っぽそうなのしかなかったので、インスタントのうどんとつまみになりそうな惣菜を一つ放り込む。

会計を終え外に出る。足下に落ちる薄い影にふと見上げると、外灯の明かりだけで月はまだ出ていない。

「これ、美味しいの？」

不意に聞こえた問いかけに思わず足を止めた。

「え?!」

声のした方を向くと小さな黒い影が夜の闇に消えていくところだった。

「朔?」

突拍子もない思いつきに我ながら苦笑が漏れる。

二十三夜の夜半過ぎ。月待ちをすることで願いが叶うなら……

シャワーを浴びる時間くらいはあるだろうか。

ビールを片手に下弦の月を待とう。

晦(つきこもり)

『美味しいの?』

朔が喋るはずがない。というか、そもそもあれが朔かどうかも怪しい。

そう頭では分かっているのに、あの日から冷蔵庫の缶ビールは常に1本余分に冷えている。

他部署の不具合は昨日でなんとか收拾がつき、応援部隊に借り出されていた面々はすっかりばてていた。

「お先」

そう言い置いて、今まで見たこともない程過労でくたびれた上司が早々に荷物を纏め出て行く姿を見送りながら自分もデスクを片付けていたら、「今度の金曜、空いてる?」と同期から声を掛けられた。「なんで?」

「今回のお詫びにお疲れ会をする事になったから、出欠とってるとこ」

「そつえば不具合を出したのはこいつの部署だ。」

「そつちのおごり?」

「もちろん」

気前よく頷くからには、こいつの上司がメイン出資者なのだろう。確か独り身管理職のはずだから、懐具合の心配をせずに安心して飲める。

「行く」

即答し鞆を持って席を立つ。

「今日じゃなくて金曜だよ」

「分かってるって。どこそそのせいで残業時間が超過しそうだから帰るだけ」

会社の窓から見える空にはまだ夕陽が居座っているが、なんとなく朔が来る気がして落ち着かない。

「じゃあ今からデート？」

「はあ?!なんでそうなる？」

「前に恋人が出来たって話を聞いたよ。こんなに定時きっかりに帰るならそうでしょ?」

「違う。猫が」

「猫?飼ってるの?」

「いや、拾った猫なんだけど……」

恋人説は里親探して定時帰りしたのを勘違いされたと釈明したが、どうにも半信半疑の様子だ。

「ふーん」

頷きながらも、もの言いたげな同期の視線を無視し、タイムカードをスリットする。【子猫が喋る】なんて荒唐無稽な妄想を信じたい思いで些か浮き足立っているとは、とてもじゃないが言えない。

「じゃあ、お先に」

「お疲れ」

そそくさと会社を後にし、コンビニで夕食を買ってから自宅に帰るが、出迎えてくれるものは当然いない。とりあえずシャワーを浴びて、ビールを開ける。

喉を鳴らし缶の半分くらいまで飲み、一息ついたところでベランダの窓の端にうごめく影に気付いた。

?

大きさにしてスイカより少し小さ目で、様子を窺うと、なにやら引っ掻くような物音もする。カラスか?これといってベランダに置いていないが、巣を作っていたら嫌だ。けれど嫌だと言って放っておいたところで状況は変わらない。まずは確認しなければと、恐る恐るガラス窓を開けると……

「朔?!」

真っ黒な子猫が網戸に爪を取られもがいていた。

「こら、暴れるともつと絡まるつ。あ、網戸」

細い爪が引つ掛かった網戸には大きな穴が開き、自力で外そうとした涙ぐましい努力の跡を残している。

網戸の張替えは自分で出来るものか気になるところだが、今はこいつを助けるのが優先だ。部屋の中にとって返し、持ち出したはさみで絡まった網戸の糸を切って救出すると、子猫は一度身震いをした後、お礼を言うかのように「なー」と一回鳴いた。

真っ黒な猫など珍しくないと頭の中で繰り返しながら、淡い期待を込めて手を差し伸べたら、顔を摺り寄せてきた。

「朔？」

声を掛けられた子猫は「なー」と再度鳴き、するりと部屋に入り冷蔵庫の前に移動すると、かりかりと前足で扉を開けようとした。た。

『美味しいの？』

不意に甦る声。

化け猫？猫又？それとも偶然か？訳が分からないが、物の怪の類なら未成年ではないはずだから再開の乾杯をするにやぶさかでない。だが、その前に

「洗うよ」

今の飼い主は動物病院の近くに住んでいると獣医は言っていた。

ならば朔がここに来るまでに相当汚れているはずだ。

むんずと捕まえられたその表情はかなり不服そうだが、今は我慢してもらおう。風呂上りのビールの美味さは保障するから。

おまけ・子猫の眩き（前書き）

「晦」の朔視点です。

おまけ・子猫の呟き

ここ、結構気に入っているんだ。

新しい住処も悪くないが、不必要に機嫌を取ったり媚びない距離感も悪くないし、首から背中を撫でる手も気持ちいい。

なんとなく猫を家に置いておけない事情を察し、他で寝場所と食事を貰う事にしたけれど、たまには遊びに行ってもいいかと思って来てみたら……網に爪を取られて身動きが取れなくなるは、挨拶もそこそこに風呂場でシャワーときたもんだ。元々汚れるのは嫌だし、玄関で靴を脱ぐのも知っているから気をつけてきたのに、いきなりシャンプー！泡が目には沁みるし変な臭いが残って、鼻が利きにくくなるから嫌なのに……。

他にも文句を言えばきりがないが、まあいい。

冷蔵庫から出された缶の中身を見慣れた餌皿に注がれたから。

冷蔵庫から出された水が冷たく美味しい事も知っている。けれど水ではなく缶のそれを美味そうに飲むのに、僕は一度として舐める事すら出来なかった。美味しそうに飲む姿に、何度生唾を飲んだことか。

それが今、目の前にある。

ぷちぷちと泡がはじける小麦色のそれを、そっと舐める。

ちりつと舌を刺激する苦味に一瞬引くが、甘ったるいミルクと違う芳香にもう一舐めすると、冷たい飲み物なのにほんわかと体が温まる。その不思議な感覚に、さらに一舐め。

「いける？」

不安そうに見つめてくるので安心させるように「なー」と答えると、小さく笑われた。

「たまには遊びにおいで」

かつりと缶と皿をぶつけて微笑まれ、こっちもにんまりだ。

人とか猫とかそんな垣根はなく、浮かれ気分は伝染するらしい。

＊＊

その晩、ふわふわと気持ちよい浮遊感に身を任せ、久しぶりに人と寝た。

翌朝になってわが身を振り返り、一皿飲み切って酔いにまかせた無様なさまは、二度とするまいと恥じ入る事になるとは思いもしていません、ぐっすりと。

おまけ・子猫の眩き（後書き）

「猫と月」はここで一旦最終話とさせていただきます。

続きを書きたい気持ちがあり、朔・普通の猫版とちよつと人になれる版のどちらにしようか迷って並行して構想を練っており、より納得できる方を出せたらと思っています（ひよつとしたら決められず両方とも……）。

ここまでお付き合いありがとうございました。

くー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0432o/>

猫と月

2010年10月15日16時10分発行